

学校教育におけるモダンダンスの

指導法に関する一考察

飯野 ケ イ 子

1 緒 論

2 実験方法及び作品の分析方法

- 2.1 実 験 方 法
- 2.2 実 験 期 間
- 2.3 指 導 内 容
- 2.4 被 検 者
- 2.5 作品の分析方法

3 実験結果と考察

- 3.1 各群における一般学生とダンス部々員による評価の比較
- 3.2 各群における同主題の作品「夏祭り」の比較
- 3.3 高得点者と低得点者の作品の比較
- 3.4 各群における指導に対する感想の比較

4 総 括

1 緒 論

20世紀初期、イサドラ・ダンカンの唱えたモダンダンスはその後、ルドルフ・ラベンらによって受け継がれ、教育の分野でも扱われるようになった。

モダンダンスには2つの側面があり、それは表現とテクニックである。¹⁾ それについて江口隆哉氏は「作品をつくる時は、その作品にとってだけ必要な『表現運動』を生み出し、それがその作品の大部分を決定づける」といい、また、「作品全体を鑑賞してもらい、その作品がなにをいおうとしているか、いかにいおうとしているかを感じとってもらえばいい」と、いっている。²⁾ また gane Wineals は「考える力を鍛えることのあいだに、テクニックの必要性が増大してきた」といい、さらにテクニックについてすべての運動はダンスではテクニックと呼ばれるようになる、また「ダンスの世界ではテクニックとはしぐさのはっきりしたデモンストレーションとして漠然と解釈されてきた」といっ

ている。江口氏の場合、テクニックという言葉は『表現運動』と置き換えられている。

モダンダンスのこのような2面性から、当然指導方法にも、表現を増すような創作を中心とした方法と、テクニックを増すような方法があると推察される。

ところが学校におけるモダンダンスについては、従来、職業舞踊家の行なうモダンダンスとは別個のものであるという潜在的な考え方があり、それに基づいてややもすると、表現とテクニックのうち、表現のみを中心とする指導方法がなされて来た傾向にある。しかし最終的に作品をつくって発表するという点においては、学校におけるモダンダンスも職業舞踊家の行なうそれと同一である以上、学校におけるモダンダンスにおいてもその一方を軽視して指導を組み立てることに疑問があるといわねばならないだろう。⁴⁾

そこで学校教育での効果的なモダンダンスの指導方法を見出すには、表現を中心とした指導方法とテクニックを中心とした指導方法の2つを比較検討することが必要であると考え。

そこで今回は、この2つの指導方法を取りあげ、限られた期間及び時間内に効果的な指導を行なうための参考資料になるであろうと考え、次の2項目について比較検討を行なった。

(1) 表現力を増すような創作を中心とする指導方法と、テクニックを増すような指導方法ではどちらがよりよい作品をつくるための効果的な指導方法であるか。

(2) 高い評価の作品はどの点において優れているのか。

以上のねらいで2つのグループに各々異なった指導を与え、比較検討を行なったのでここに報告する。

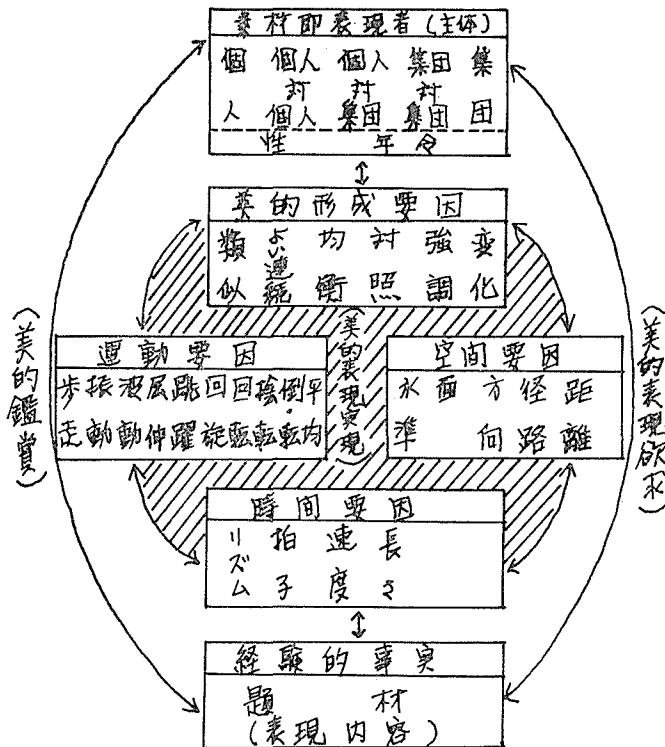
2 実験方法及び作品の分析方法

2.1 実験方法

本学幼児教育科2年生をA群, B群に分けA群には表現力を増すような創作を中心とする指導を与え, B群にはテクニックを増すような指導を与え, 1週間に1回, 8週間に渡り指導を

与え, A, B各群に同じ主題「夏」の個人創作を課した後, 更に各群から平均的な9名を選択し, (選択方法は後述), 一般学生とダンス部々員に作品の評価をさせ, A, B群を比較検討した。更に松本千代栄氏の美的身体表現の構造(図1)の特に①運動要因としての動きの種類②空間要因としての径路(軌跡)③時間要因と

図—1 美的身体表現の構造



しての速度④美的形成要因としての変化と連続の4項目をとりあげた。そして, A, B群の同主題の作品について比較検討を行なった。更にA, B群通じて高い得点を得た作品の検討を行なった。

また指導後の感想をアンケート用紙に記入させ, A, B群の比較を行なった。

2.2 実験期間

実験は昭和47年4月～7月に行なった。

2.3 指導内容

表1のごとく, 1回の指導は100分であり, 最初の40分はA, B群とも共通, 残り60分をA

B群に異なった指導を与え, 8回行なった。A群はドリスハンフリーの「創作ダンスの技法」を中心に, B群は基礎的運動要因(振動, 波動, 屈伸, 跳躍, 捻転, 回旋, 平均, 倒転, 回転, 歩, 走, その他)を中心に, 主に身体のある部分が自分の意志通りに動かせるようになることを目的として分類別に指導を試みた。

2.4 被検者

A, B各群の健康な29名の学生に個人創作の作品を発表させ, 各群の評価得点の平均値に近い9名を選択して本実験の考察の対象に当てた。なお, 評価得点は10点満点で, 作品発表者以外の一般学生25名に採点させた。

表Ⅰ 指導内容

min	A 群	B 群
	集合 (10分) Warming-up (使用曲 a day in the life) (15分) Body-training (柔軟体操) (15分)	
40	1. シムメトリーと アシムメトリー 1人の場合	基本ステップ+応用 (1)
50	2. 2人以上の場合	〃Ⅱ (使用レコード) 学校ダンス基本ス テップ曲集
60	3. フレーズのつくり方	曲に乗って動く練習 (1)
70	4. 軌 跡 (スペースの用い方)	〃Ⅱ (使用レコード) 舞踊のためのエチ ュード
80	5. 「しゃぼん玉」 個人創作	「春の歌」A, B (使用レコード) 現代舞踊基本運動
90	6. グルーピング 「花火」グループ創作 音づくり	〃 全編
100	7. リズム, テンポ, ダイ ナミックについて	ウォーキング, ランニ ング, ターン, ジャン プ倒
	8. 〃 (創作に関するテスト)	ターン, ジャンプ (動きに関する テスト)
	9. 個人創作発表	

2.5 作品の分析方法

個人創作の作品は V.T.R に収録し作品分析に用いた。V.T.R は SONY AVC—3500, AV—3500 を使用した。

2.5.1 運動要因の測定

V.T.R を作動させ、作品の観察により運動要因としての動きの種類をかぞえる方法をとった。

2.5.2 空間要因 (軌跡 or 経路) の測定

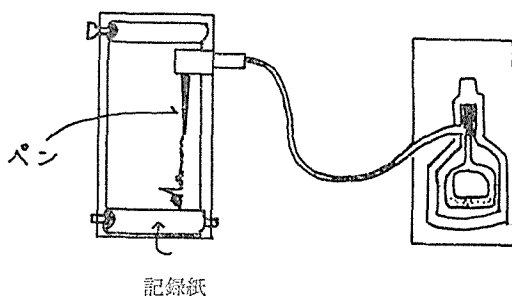
V.T.R を作動させ、作品の観察により軌跡を追って方眼紙に記入する方法をとった。しかし前後についてはやや正確さを欠くので A, B 群の比較にとどめるものとする。

2.5.3 時間要因 (速度) の測定

V.T.R を作動させ、作品の観察により、被検者の身体の一部が動くとき図Ⅱのような装置の針を押し、身体の動きを時間の経過とともに記録紙に記す方法をとった。

記録紙の速度は 1 mm/sec で、一定時間内に身体の一部が何回動くかを見るものである。

図—Ⅱ リズムを捉える装置



2.5.4 美的形成要因 (変化とよい連続) の測定

V.T.R を作させ、作品の観察により、たて軸に運動要因としての動きの種類の変化、よこ軸に動きの連続を時間経過によって測定し、グラフに記入する方法をとった。

たて軸の運動要因 (動きの種類) は表Ⅱのように 1~4 は身体的要素に機械的に分類し、5~7 は高度な動きとして区別して分類した。

表Ⅱ 運動要因の分類

- | | |
|---|---|
| 7 | ジャンプ |
| 6 | ターン |
| 5 | 平均, 開脚 |
| 4 | 胴の部分 (ダ動, 捻転, 倒, 横転, (転) 緊張, 解緊, 回旋, 振動など) |
| 3 | 上肢・下肢 (振りあげ, 回旋, 波動, 振動, 屈伸, ホップ, スキップ, マズルカなど) |
| 2 | 歩く・走る (他の要素は同時に行わない) |
| 1 | 静止, 末梢部のみ動かす (手首, 足首, 首) |

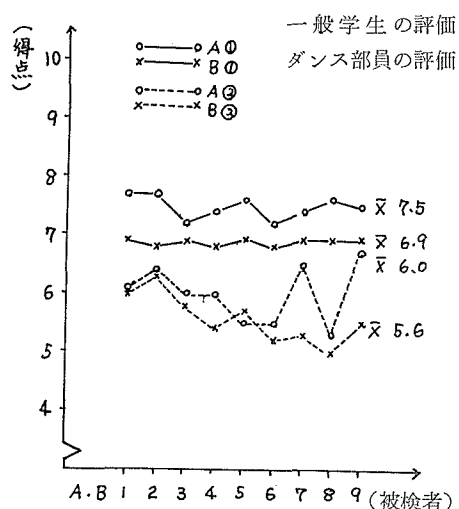
3 実験結果と考察

3.1 各群における一般学生とダンス部々員による評価の比較

図一Ⅲは一般学生とダンス部々員の A 群と B 群の評価の比較曲線である。

①は各群の一般学生が評価した得点の平均点であり、②はダンス部々員 3 名に V.T.R を作動させ、作品の観察を行なわせながら評価した得点の平均である。①(A 群=7.5(X) B 群=6.9(X)), ②(A 群=6.0(X) B 群=5.6(X)) といずれも A 群の方が高い得点を獲得している。

図——Ⅲ 一般学生とダンス部々員の評価



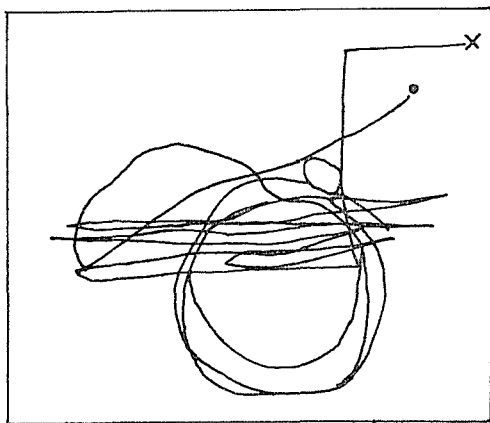
3.2 各群における同主題「夏祭り」の比較

3.1 においてA群が高い得点を得ているという結果を得たので、ここではA群とB群から同じ主題の「夏祭り」を取りあげ、更に詳しく各要因別にA群とB群のちがいを比較検討した。

図一Ⅳ 「夏祭り」の動きの軌跡の比較

A群

Sub=M. K



3.2.1 運動要因 (動きの種類)

表一Ⅲ 「夏祭り」の運動要因の比較

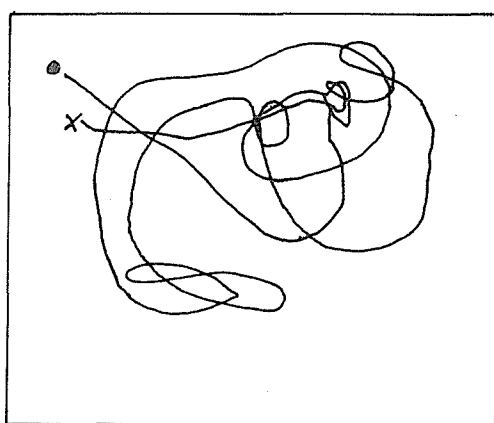
群	動きの順序	種類
A群	回歩走回スラマズ歩 → → → → キンブルカス → → → → ツニ→	6
	転くる転プグプく	
B群	首をまわす → 上体の振動 → 歩 → バラ → バラ → 片足 → 回	7
	→ → → → → → → →	

表一Ⅲは「夏祭り」の動きの順序(種類)をあげたものであるが、A群では動きの種類は6 B群では7であり、A, B群の差は認められなかった。

3.2.2 空間要因 (軌跡)

B群

Sub=M. S

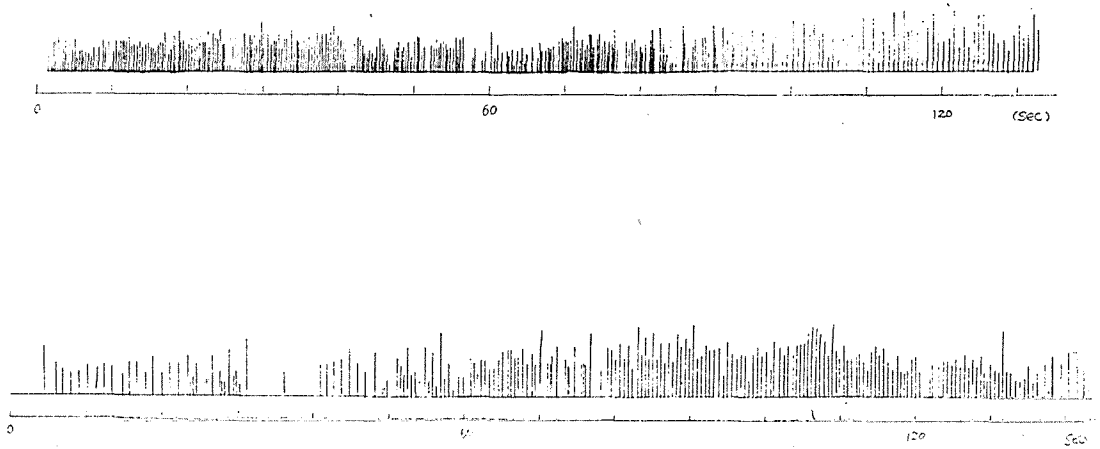


● スタート
x 終り

図一Ⅳは「夏祭り」の動きの軌跡であるが、A, B群とも比較的场所を広く使って、A, B群の差は認められなかった。

3.2.3 時間要因 (速度)

図一V 「夏祭り」の動きの速度の比較

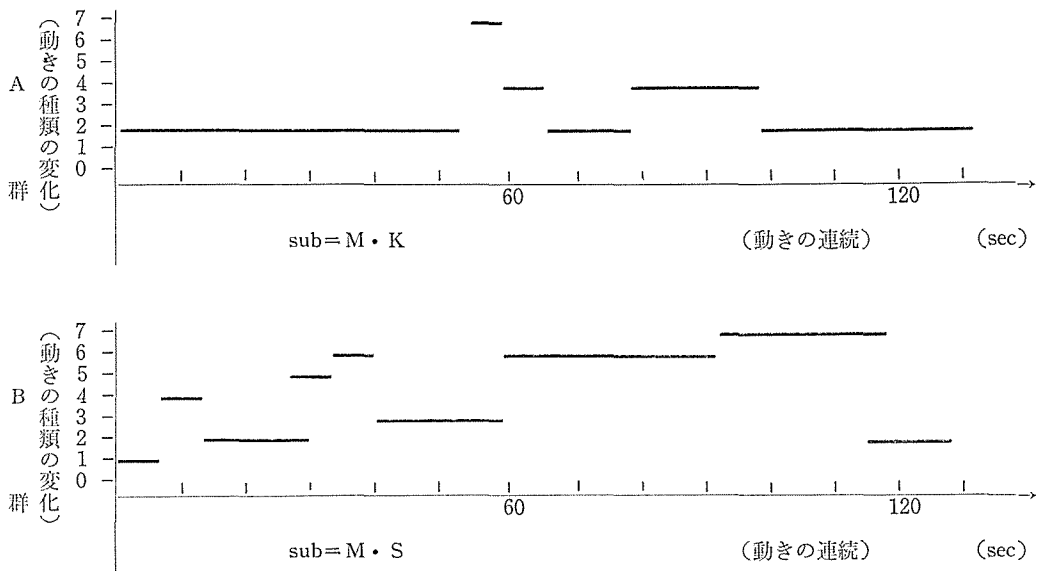


図一Vは「夏祭り」の動きの速度を示したものであるが、A群の被検者M・Kの場合、はじめから速いテンポでスタートし、最後まで速いテンポを維持しており「祭り」という楽しさを速いテンポで表現していることがわかる。一方

B群の被検者M・Sについても、スタートは遅いテンポであるが後半の部分では速いテンポに移行し、クライマックスを後半に持っていった感じがする。A・B群とも単位時間あたり動く量は多く、両群の間に差は少なかった。

3.2.4 美的形成要因（よい連続と変化）

図一VI 「夏祭り」の動きの変化と連続



図一Ⅵは「夏祭り」の動きの変化と連続を示したものであるが、A群の被検者M・Kの場合同一の動きが連続して、あまり動きの変化はない。又B群のM・Sの場合も前半45秒までは動きが変化しているが後半はやはり動きが連続されている。

A・B群とも同一の動きをくり返すことで、「夏祭り」という主題を表現している点がうかがえる。

以上、4項目の要因別の比較は表一Ⅳのよう

表一Ⅳ

	A 群	B 群
① 運動要因(動きの種類)	6	7
② 空間要因(軌跡)	大	大
③ 時間要因(速度)	速い	速い
④ 美的形成要因(変化と連続)	連続	連続

になり、「夏祭り」という作品の表現構造はA

群もB群もよく似ている。にもかかわらずA群の方が高い得点を得ている。ということは4つの要因(動きの種類、軌跡、速度、変化と連続)以外の要素が働いて高い得点を得ているものと推察される。

3.3 高得点者と低得点者の作品の比較

A・B両群の中で高い得点を得ている作品、及び低い得点の作品を、3.2 であげた4項目で検討したものが表一Ⅴである。

A・B群を通じて高い得点を得ている作品は主題と4項目に関連性があり、低い得点の作品は4項目のうちのいずれかが主題とつながりのないことがわかる。たとえばA群「砂漠」という作品の場合、少ない動きをくり返し、ゆっくりしたテンポで重い感じを出し、4項目が全て主題とつながりがあり、高い得点を得ているのに対し、B群の「けだるさ」については、4項目のうちの「速度」に関して、主題の「けだるさ」というユーウツな感じとちがった速いテンポで

表一Ⅴ 得点と表現構造との関係

A 群						B 群					
主 題	得 点 ※	動きの 種類	軌跡	速度	変化と 連続	主 題	得 点 ※	動きの 種類	軌跡	速度	変化と 連続
波 と ヨ ッ ト	7.7 6.1	5	中	遅い	連続	波	6.9 6.0	6	大	速い	連続
砂 漠	7.7 6.4	4	中	遅い	連続	嵐	6.8 6.3	5	大	速い	変化
夏 祭 り	7.2 6.0	6	大	速い	連続	夏 祭 り	6.9 5.8	7	大	速い	連続
け だ る さ	7.4 6.0	7	小	遅い	連続	け だ る さ	6.8 5.2	4	大	速い	連続
カ ニ	7.6 5.5	4	小	遅い	連続	水 の 戯 れ	6.8 5.4	7	大	速い	変化
雷	7.2 5.5	5	大	速い	変化	日 の 出	6.9 5.7	6	小	遅い	変化
こわれた扇風機	7.4 6.5	5	中	速い	連続	空	0.9 5.3	7	中	普通	変化
砂 丘	7.6 5.3	3	大	速い	連続	花 火	6.9 5.0	9	小	普通	変化
夕 立	7.5 6.7	5	大	普通	連続	夕 立	6.9 5.5	4	中	速い	変化

※ 得点欄の上の数値は一般学生、下の数値はダンス部々員の評価点である。

作品が構成されているため、主題の「けだるさ」が見る者に伝わってこない。したがって結果的に低い得点となって表われている。他の高得点作品、低得点作品についても同様のことがいえる。

更に、主題と4項目が、全てつながりがあるにもかかわらず、低い得点の作品については、3.2 で述べたように、4項目以外の他の要因が作用しているものと推測される。

3.4 各群における指導に対する感想の比較

指導に対する感想は、個人創作の作品発表の際、各人にアンケート用紙を配り、答えてもらったものである。総体的にA群は、「恥しい」「創造性がない」「むずかしい」「苦しい時間」「身体が思うように動かない」といった、むしろ苦痛を訴える感想が多いのに対し、B群では「身体が柔らかくなった」「いろいろな動きを学んだ」「高校時代より受けやすかった」「基本ステップをマスターした」「楽しかった」というような動いて汗を流す楽しさを感想で述べている。

更に加えると、松本千代栄⁵⁾氏の指導法の実験的研究より、創作を中心に指導したグループは既成作品による一斉指導より「教科外活動への影響」「学級のまとまり」「集団としての表現技能および活動」において優っているという結果が報告されている。

4 総 括

限られた期間及び時間内に効果的な指導を行なうためにはどのような方法が望ましいか、という仮説に対し、表現力を増すような創作を中心とする指導法と、テクニックを増すような指導法をとりあげ比較実験を試み、次のような結果を得た。

- 4.1 表現力を増すような、創作を中心とする指導のグループ(A群)は、テクニックを中心として振導したグループ(B群)より高い評価得点を得た。

しかし効果的指導という点から、モダンダンスの指導に対する被検者の感想を考察すると、A群は「苦痛だ」「恥しい」という感想が多く、(B群)は「楽しい」

という感想が多いという結果を得たことは今後の指導に検討を要する点であろうと推察される。

- 4.2 同主題によるA群とB群の比較は、作品を構成している、①運動要因、②軌跡③速度、④変化と連続、についてはほとんど変化が認められなかったにもかかわらずA群の作品の方が高い評価得点を得ているということは、上記の4つの要因の他に高い評価得点を得る要因があるのではないかと推察される。

- 4.3 A群・B群を通じて高い得点を得ている作品については、主題と上記にあげた4つの要因が深く関連していることがわかった。特に主題と「速度」についての関連は切り離すことができないものと考察される。

後 記

1. 昭和47年4月～7月のうちの授業時間を実験に当てたため、表現力を増すような創作を中心とするグループについては、1回の授業内容の全てを創作にあてたものではなく、授業の前半40分はwarming-upを含めたbody-trainingを行なったため、純粋な創作のみのグループではない。
2. 本実験の結果から、表現力を増すような創作を中心とした指導を与えたグループは、運動要因、軌跡、速度、変化と連続4つの要因以外の要因が働いて高い評価得点を得ていることが推察されたわけであるが、どのような要因が働いて高い評価得点を得ているのかは、今後研究する余地があるものと考えられる。

最後に、本実験にあたり御指導いただきました、本学教官石黒国雄先生、平賀正治先生に深く感謝致します。

参 考 文 献

- (1) Jane Wineals ・ 創作ダンス入門 ・ 大修館書店
- (2) 江 口 隆 哉 ・ 舞踊創作法 ・ カワイ楽譜
- (3) Jane Wineals ・ 前出
- (4) 邦 正 美 ・ 教育舞踊原論 ・ 万有出版刊
- (5) 松 本 千代栄 ・ 舞踊美の探究 ・ 大修館書店